＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　GCOE NewsLetter
[No.18　2009/3/26]

2009 年度第 1 回グローバル COE プログラム大学院説明会について
2009 年度第 1 回グローバル COE 研究アシスタント募集について
次回のオープンレクチャーについて
グローバル COE 論文賞の審査結果
グローバル COE 第 5 回国際研究集会の概要
グローバル COE 第 6 回国際研究集会の概要
グローバル COE 講演会の要約
第 16 回オープンレクチャーの要約
グローバル COE 研究教育員ブリーフィング要約
グローバル COE スタッフ海外出張報告
就職のお知らせ
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 2009 年度第 1 回グローバル COE プログラム大学院説明会について

2009 年度のグローバル COE の活動内容や公募事業について説明会を行います。「大学院学生海外派遣事業」、「グローバル COE 論文賞」、「グローバル COE 授業科目」等が説明される予定です。
皆さんの参加をお待ちしています。

日時：2009 年 4 月 7 日（火）14 時 50 分〜
場所：文学部講義棟 237 室

■ 2009 年度第 1 回グローバル COE 研究アシスタント募集について

昨年度後期に引き続きグローバル COE 研究アシスタントを募集します.
詳細は上記のグローバル COE プログラム大学院説明会で説明しますので，説明会にご参加ください.

■ 次回のオープンレクチャーについて

2009 年 4 月 15 日（水）18:00〜　名古屋国際センタービル 15F　COE オフィス

講演者、題目等の詳しい情報については、決定し次第グローバル COE の Web ページに掲載します。

■ グローバル COE 論文賞の審査結果

グローバル COE 論文賞に応募いただきありがとうございました。
選考委員会での審議の結果，次の論文を顕彰することになりましたので発表します。
両論文に対する授賞式と副賞の贈呈式を 4 月 7 日、上記の GCOE プログラム大学院説明会に先立って行います。

（順不同）

福岡麻子「初期エルフリーデ･イェリネクにおける言語の複数性- 1970-80 年代　女性の書く主体を解体する試みの一例 -」

【講評：釘貫亨】
本論文は、オーストリアの女流作家イェリネクの初期の作品に関して、テクスト、政治思想そして論者が「言語の複数性」と呼ぶイメージの交錯を野心的に論じたものである。1970 年代から 80 年代にかけてのイェリネクは、マルクス主義とフェミニズムの立場を取っており、従来の研究はそのような方面から主として論じられてきたという。論者は、このような先行研究の趨勢に対して、イェリネクがオーストリアのユダヤ文化から受け継いだとされる言葉遊びの多用に着目して、「政治的な作家」としてのイェリネクの既存の姿を、彼女の単純ではない自作品への発言と併せて解体しようとする。特に論者が留意するのは、言葉の意味よりも形や音に重心を置いたり、視覚的効果を狙った文章配置や男女の役割に関する保守的で陳腐な言辞を意図的に押し出す「皮肉」の効果など、異和感を読者に与える複雑な作者の戦略を摘出している。特に広告媒体と写真に現れる「女性」への彼女の視線と独自の表現を論じた後半の分析は、イェリネクが政治思想を超越して高い評価を受けた根拠を如実に照らし出している。現代文学と対峙する論者の誠実な姿勢が印象的である。ただ、論点が作者とフェミニズムとの関わりに絞られている点が惜しまれる。今後の課題であろう。

山下英夫「Monstruosite dans Madame Bovary de Gustave Flaubert. Etude genetique」
【講評：松澤和宏】
　本論文は、フローベールにおける怪物性というテーマに着目して、作家がこのテーマについて意識していた形跡を書簡や初期作品といった様々なテクストの分析を通して明らかにし、ヒロインのエマや薬剤師オメが、有限な人間存在と広大な汎神論的な宇宙愛という二つの極の間に引き裂かれている近代人の運命のなかに書き込まれていることを論じた力作である。近代人は、一方では科学の進歩による自然の征服という傲慢に陥り、自らを超える一切のものを否定しようとする。みずから神の座を簒奪しようとする人間中心主義を体現したオメは、名誉勲章受勲を目指して次第に異様な怪物的存在と化していく。エマも又自由平等という民主主義的理念のなかで芽生えてくる羨望ゆえに、怪物性を帯びてくる。本論文は、一見すると対照的な二人の作中人物がともに近代社会の産み落とした怪物であることを明らかにし、この構造が初期作品から一貫して見られることを指摘して、怪物性の主題の重要性を浮き彫りにすることに成功している。但し、怪物性のより厳密な規定が、「グロテスク」や「凡庸」といったフローベール的主題との関連で今後追求されなければならないであろうし、参考文献の引用などに若干の不備が認められる。しかしながら、これまで論じられることのなかった怪物性の主題を発掘し、テクスト布置に留意しながら新たな解釈を目指した点は高い評価に値しよう。

■ グローバル COE 第 5 回国際研究集会の概要

2009 年 3 月 5 日（木）～7 日（土）
『知のテクスト化』
パリ東大学、国立図書館リシュリュー館（フランス）にて開催。
コーディネーター：ジゼル・セジャンジェール（パリ東大学教授）、松澤和宏（文学研究科教授）

3 月 5 日にパリ東大学マルヌ・ラヴァレキャンパスにて、パリ東大学と名古屋大学との全学間学術交流協定および学生交換協定が山本進一理事の立ち会いのもと、リクテンベルジェパリ東大学長の署名により締結された。この締結と併せて、パリ東大学の研究グループ「文学・知・芸術」と文学研究科グローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」との共催による国際シンポジウム「知のテクスト化」が、認識論的批評の第一人者モントリオール大学ピエールサンス教授の講演によって開幕した。この国際シンポジウムには、カナダ、アメリカからの発表者も含め約 30 名が参加して、文学テクストに同時代の科学をはじめとする様々な知がどのように組み込まれ、いかなる意味や文体上の効果を生んでいるのか、というテーマを軸に充実した発表と白熱した議論が交わされた。松澤和宏教授はフローベール『ブヴァールとペキュシェ』において語られる教育の失敗の物語が、知の伝達を保証してきた権威の喪失を浮き彫りにしていることを明らかにし、鎌田隆行講師はバルザック『人間喜劇』の序文における知の問題を草稿にあたって克明に分析した。またフォヴェルグ外国人教師はフローベールにおけるライプニッツ受容の問題点を初めて明らかにし、永田道弘研究員はフーコーのルッセル論を草稿研究に基づいて批判しつつアフリカの表象という新

たな解釈の地平を提示した。共有する問題を論じ合うことで親睦を深める機会ともなり、実り豊かな 3 日間となった。

■ グローバル COE 第 6 回国際研究集会の概要

2009 年 3 月 7 日（土）～8 日（日）
『歴史テクストの解釈学。針路、解釈実践、新たな諸問題』
東京国際フォーラムにて開催。
コーディネーター：佐藤彰一（文学研究科教授）

去る 3 月 7 日と 8 日の 2 日間にわたって東京国際フォーラム、ホール D5 を会場として、グローバル COE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」の第 6 回国際研究集会が開かれた。今回の主題は「歴史テクストの解釈学。針路、解釈実践、新たな諸問題」と題され、海外からの招聘報告者も含めてヨーロッパの中世の歴史記録を主な対象とする 11 のペーパーが読まれ、活発な質疑が繰り広げられた。東京での研究集会の開催は初めてであり、どれほどの参加者が足を運んでくれるかやや不安もあったが、西洋中世の文書、歴史記述、図像の高度に専門的なテーマであるにも関わらず、事前の登録参加者が北は北海道から、南は九州まで 100 名近くを数え、大きな成功を収めることができた。その大きな原因は、海外から招聘した講演者の豪華な布陣である。オクスフォード大学のクリス・ウィッカム教授は、50 代後半の目下世界の中世史学者の頂点に立つ存在であり、その夫人レズリー・ブルベイカー・バーミンガム大学教授は、ビザンテイン美術史の第一人者である。またパリから参加したパリ第一大学教授レジーヌ・ルジャン教授は中世初期貴族研究の専門家で、夫君のフランソワ・ムナン・パリ高等師範学校教授は、中世イタリア・ロンバルディア封建社会研究の泰斗である。ベルギーからは、この国の中世学界の風雲児とも言うべきナミュ―ル大学のエティエンヌ・ルナール博士が加わった。さらにパリ第四大学のスミ・シマハラ講師は、中世聖書註釈学の新進気鋭で、将来のフランス中世史学界を担う逸材とされている。当日の参加者の圧倒的多数が、わが国の若手の研究者で占められ、多くの質問が彼らから発されたことは、私どもの狙いにまさしく合致しており、その点でも極めて意義深い研究集会であった。

■ グローバル COE 講演会の要約

講演者：アラン・ディールケンス博士（ブリュッセル自由大学教授）
題目：「キルデリクス（481 年没）とクローヴィス（511 年没）- 歴史，考古学，文書作成 -」
日時：2009 年 2 月 23 日（月）午後 2 時～5 時 20 分

九州大学文学部岡崎敦准教授の招聘により来日したブリュッセル自由大学教授アラン・ディールケンス氏の講演会が、2 月 23 日（月）午後 2 時より名古屋大学文学部大会議室で開催された。「キルデリクス（481 年没）とクローヴィス（511 年没）- 歴史，考古学，文書作成 - 」と題された講演は、文字記録と考古資料とを付き合わせながら、メロヴィング朝の基礎を築いたこの二人の王の姿を浮かび上がらせるとともに、史料の不足ゆえに闇に包まれたこの時代に新たな光を当てる可能性を有する資料として印章付き指輪を取り上げるものであった。われわれにとって興味深かったのは、次の二つの主張である。第一に、トゥルネで発掘されたキルデリクスの墓から知られるその埋葬形態（墳丘型 tumulus、馬の供犠）が中央アジアで広まっていた慣行と類似しており、この事実が他の史料から知られるキルデリクスの東方への追放と関連づけられる可能性である。第二に、メロヴィング期から数多く残る印章付き指輪の中でも最近発見された二点の証拠が、金の組成や銘文の書体や図像の様式から申し分なくメロヴィング期の遺物と推定されるにもかかわらず、偽造の可能性が高いとする主張である。この時期の考古学遺物に通暁したディールケンス教授ならではの判断である。講演後は、この第二点目を中心に活発な質疑応答が交わされ、1 時間の質疑の時間が短く感じられた。（文責・加納修）

■ 第 16 回オープンレクチャーの要約

2009 年 2 月 18 日（水）18 時～19 時　名古屋国際センタービル 15F　GCOE オフィス
講演者：佐藤彰一（文学研究科教授・西洋史学）
題目：『アリストテレス哲学の「発見」と中世初期ヨーロッパ』

2008 年 3 月にパリの定評ある出版社スイユ社から刊行された 1 冊の書物は、やがてその内容の妥当性ばかりでなく、著者のイデオロギーと、政治的立場をめぐってフランスで大きな論議を巻き起こした。その書物の題名は『モン・サン・ミシェルのアリストテレス』、著者は中世ヨーロッパ史の専門家で、リヨン高等師範学校教授のシルヴァン・グーゲネムである。古代ギリシアの知的遺産がどのようにして中世以降のヨーロッパに継承されたかという問題は、これまで「12 世紀ルネサンス論」という文化史上のトピックとして論じられてきた。なかんずく、近代哲学の先駆であったスコラ学の淵源となったアリストテレス哲学が、いかにして中世ヨーロッパに浸透したかについては、アメリカ合衆国のチャールズ・ホーマー・ハスキンズの所説が定説として君臨している。すなわち、西ローマ帝国崩壊後に西ヨーロッパは文化的に衰退し、古代ギリシアの知的遺産、とりわけアリストテレスの『自然学』をはじめとする最重要の作品は忘れ去られた。それがヨーロッパで再び陽の目を見たのは、1085 年にキリスト教徒がトレドを奪回し、トレド大司教ライムンドゥスのイニシアティヴによって、アラビア語文献のラテン語への翻訳活動が精力的に行われ、その成果としてアリストテレスはヨーロッパの甦ったとする主張である。グーゲネムはこの定説に根本的な異議を唱え、トレドの翻訳センターが活動する数十年前に、すでにベネツィアのヤコブスという修道士の手で、モン・サン・ミシェル修道院で、『自然学』の翻訳が完成していた事実（この写本は現在同修道院の所在地に近いアヴランシュ市立図書館に収蔵されている）、さらにはそもそもアリストテレス哲学を初めとして、古代ギリシア哲学がヨーロッパの知的景観から姿を消したことは一度もなかったとする極めてラジカルな議論を展開した。

グーゲネムの書物に対する一部の激しい反発には理由がある。とりわけ第 4 章「イスラームと古代ギリシアの知」、第 5 章「文明の問題」、結論「アポロンの太陽が西洋を照らす」は、学問的な議論の規矩を甚だしく逸脱したものとの印象を拭えない。こうした大きな欠陥を抱えた書物ではあるが、文化史の面からは、古代ギリシアの知が通説の言うように、果たして西洋中世から失われてしまっていたのか、この点を史料に即して再検討を促す刺激をもたらしたという学問的意義は否定できない、というのが報告者の結論である。

■ グローバル COE 研究教育員ブリーフィング要約

第 12 回ブリーフィング(2009 年 2 月 19 日)
永田道弘「Procede et/ou processus - レーモン・ルーセル『アフリカの印象』の生成をめぐって」

言語の形式的構造からルーセルを評価する従来の批評は、「手法（プロセデ）」を強調するあまり、ルーセルをルーセルたらしめている奇想がいかにして生まれたか十全に説明していない。「プロセデ」だけで物語の奇矯さの形成すべてを説明することが不可能である以上、物語内容のレベルで働く創作方法を作品の生成プロセスから見出す研究があってしかるべきである。
今回のブリーフィングでは、『アフリカの印象』を同時代のアフリカを題材とした通俗小説のパロディと考え、生成批評の外的生成／内的生成の概念を用いながら、草稿の改訂過程での先行テクストに対する模倣・変形操作のプロセスを検証した。特に黒人王の人物像に焦点をあて、パロディの対象として外部から取り込まれたアフリカの通俗的表象が、執筆を通じて作品の内在的論理によってどのような変容を蒙っていくのかを分析した。このような生成プロセスの分析を通じて明らかにされたものとは、「プロセデ」とは別種の創作方法 - 作品の外部から紋切型ないしは個人的嗜好に合致するイメージを取り込んで複数のエピソードをつくり、それらを言わばコラージュのように結びつける - であった。このように生み出されたルーセルの奇想は、同時代の通俗小説に内在する人種差別的イデオロギーに対する一種の批判性をも内在したものであることが理解された。
言語の形式的構造からルーセルを評価する従来の批評は、「手法（プロセデ）」を強調するあまり、

ルーセルをルーセルたらしめている奇想がいかにして生まれたか十全に説明していない。「プロセデ」だけで物語の奇矯さの形成すべてを説明することが不可能である以上、物語内容のレベルで働く創作方法を作品の生成プロセスから見出す研究があってしかるべきである。
今回のブリーフィングでは、『アフリカの印象』を同時代のアフリカを題材とした通俗小説のパロディと考え、生成批評の外的生成／内的生成の概念を用いながら、草稿の改訂過程での先行テクストに対する模倣・変形操作のプロセスを検証した。特に黒人王の人物像に焦点をあて、パロディの対象として外部から取り込まれたアフリカの通俗的表象が、執筆を通じて作品の内在的論理によってどのような変容を蒙っていくのかを分析した。このような生成プロセスの分析を通じて明らかにされたものとは、「プロセデ」とは別種の創作方法 - 作品の外部から紋切型ないしは個人的嗜好に合致するイメージを取り込んで複数のエピソードをつくり、それらを言わばコラージュのように結びつける - であった。通俗的な黒人王の物語に、それと同時並行で書かれた別の物語（女装した白人歌手の幼年期の物語）から抽出した要素をはめ込むことで、二つの物語系列を融合しつつ、そのどちらにも属さない第三の系列の物語が作り出されたのである。この新たな物語性の特権的象徴が「女装した黒人王」の形象である。黒人王以外にも、西洋人でもアフリカ人でもあるような、男でも女でもあるような、既成の価値体系によってはアイデンティファイすることが不可能な倒錯的人物が多く登場する。これらの人物の造形にあたって、ルーセルは、性差や人種といった、文化が割り当てた属性や役割を遊戯的に攪乱している。彼のこのような身振りは、結果的に、同時代の通俗小説に内在する西欧中心主義的イデオロギーに対する一種の批判にもなりえていると考えられよう。

■ グローバル COE スタッフ海外出張報告

重見晋也（gCOE 事業推進担当者・電子テクスト学）
平成 21 年 3 月 9 日より 3 月 14 日までエクス＝マルセイユ第 1 大学（プロヴァンス大学）とグローバル COE プログラムとの間で締結を進めている博士後期課程に関わる学術交流協定の打ち合わせのため，プロヴァンス大学を訪問した.
打ち合わせは主に同大学国際交流コーディネーターの Amira KHELLAF 氏と行ったが，それに先だって同大学博士後期課程の全体責任者である FANLO 教授を交えて懇談し，今後の見通しなどについて意見を交わした.
今回の打ち合わせの議題となったのは，主としてダブル・ディグリー制度に関わるものであり，同大学が日本の他の大学と実施しているダブル・ディグリー制度について説明を受けると共に，名古屋大学の現状について説明した．ダブル・ディグリー制度の本格的な導入に向けた具体的な取り組みとして，共同論文指導という形でプロヴァンス大学博士後期課程 1 年に在籍する学生を重見が担当して指導することを確認した.
今回，博士後期課程に関する学術交流協定の内容について合意に達したため、プロヴァンス大学と平成 20 年度中に正式に協定を交わすことが可能になったことを報告するものである.

鎌田隆行（gCOE 事業推進担当者・フランス文学）
3 月 4 日～14 日、フランスに滞在し、gCOE 第 5 回国際研究集会『知のテクスト化』（3 月 5 日～7 日）に参加して研究発表を行い、その後フランス学士院にてバルザック『セザール・ビロトー』の作品制作資料の調査を行った。
研究集会の全体像については松澤教授より報告が行われているので、私の方では自分の専攻するバルザック研究に関わる点のみ記しておく。
今回、二日目の午前のセッションにおいて、拙論を含む四本の発表がバルザックにおける知のテクスト化を対象とするものであった。バルザックにおける様々な知（歴史、科学、医学、思想など）への依拠は、小説による総体的な社会表象という当時としては未曾有の試みの中で、すなわち十全な先行モデルが存在しない状況で、その表象対象である混沌とした同時代の社会に可視性を与えるための装置である。いささか強引なまでに召還されている様々な知はしたがって決して一枚岩にはならず、さながらモザイク状に組み合わされ、時に互いに論理的に矛盾しあってもいる（これに対して、今回の研究集会でも論じられたように、バルザックという「先行モデル」を持つフローベールにおいては、小説中で知に対してアイロニカルな距離が取られている）。そうした多様性や矛盾、曖昧さの絵解きをどう行うかが研究上の魅力となってくる。今回の四本の発表では精神分析、表象

論、生成論などの多様なアプローチから読解が行われ、近年のバルザック研究における方法論の展開を反映するものであった。とりわけ『あら皮』における知を論じたジャック＝ダヴィッド・エブギー氏（ナンシー第二大学）の発表は、最も総合的な観点からバルザックにおける小説美学の構築のための知の援用の論点整理を行うものであった。またミシェル・アキアン氏（パリ東大学）の発表は精神分析の観点から『谷間の百合』における知の現われを考察するものであり、ローランス・ゲレック氏（パリ・デカルト大学）の発表はバルザックの複数の作品に見られる架空の商業広告文に断片的に援用された科学を論じる、いずれも斬新なものであった。拙論は、『幻滅』初版（1837年）の序文においてバルザックが後に『人間喜劇』の「総序」（1842 年）で詳述することになる「科学的」原理に初めて本格的に言及する一方で、そうした意図に相応する作品群の新たな分類（これが後の作品群に対して生成効果を持つ）を練り上げていったことを生成資料に基づいて論じた。
会場には、クレール・バレル＝モワザン氏（ティエール財団給費生；CNRS 研究員）や滞仏中の大下祥枝氏（沖縄国際大学）、松村博史氏（近畿大学）ら、日仏の尊敬するバルザック研究者の方々が多忙な時間を割いて来聴に駆けつけてくれたことも記しておきたい。

永田道弘（gCOE 研究教育員・フランス文学）
名古屋大学文学研究科グローバル COE とパリ東大学の共催による国際シンポジウム『知のテクスト化』（3 月 5 日〜7 日）に出席し、「フーコーを超えて - 新しいルーセル像の読みの試み」の題にて、過去２年間のグローバル COE プログラム（「テクスト布置の解釈学的研究と教育」）における自身の研究成果を発表。私が参加したのは、ミシェル・アキアン女史の司会による、主に 20 世紀の作家に関する研究発表を集めたセッションであった。ビュトールと音楽を論じたフランシス・クロドン教授（パリ東大学）の「ビュトールと音楽知 - 『ディアベリの主題による 33 の変奏曲との対話』」は、文学の枠組みを超えた領域横断的な発表であり、大変刺激的な内容であった。その他にも、ジェラール・コジェ教授（リール大学）が、その数多の著作数にも関わらず、フランス文学史ではあまり取り上げられることのない作家ジャン・ジオノの『屋根の上の軽騎兵』を、コレラといった独特の視点からユーモラスに論じていた（コジェ氏はまた、ルーセルについても研究しており、私も博士論文で彼の論文を引用している。個人的な面識は全くなかった氏と、こうして同じシンポジウムで発表するとは、まさに奇遇といえよう）。
私自身の発表内容は以下の通りである。言語の形式的構造からルーセルを評価する従来の批評は、「手法（プロセデ）」を強調するあまり、ルーセルをルーセルたらしめている奇想がいかにして生まれたか十全に説明していない。「プロセデ」だけで物語の奇矯さの形成すべてを説明することが不可能である以上、物語内容のレベルで働く創作方法を作品の生成プロセスから見出す研究があってしかるべきである。今回の発表では、『アフリカの印象』を同時代のアフリカを題材とした通俗小説のパロディと考え、生成批評の外的生成／内的生成の概念を用いながら、草稿の改訂過程での先行テクストに対する模倣・変形操作のプロセスを検証した。特に黒人王の人物像に焦点をあて、パロディの対象として外部から取り込まれたアフリカの通俗的表象が、執筆を通じて作品の内在的論理によってどのような変容を蒙っていくのかを分析した。このような生成プロセスの分析を通じて明らかにされたものとは、「プロセデ」とは別種の創作方法―作品の外部から紋切型ないしは個人的嗜好に合致するイメージを取り込んで複数のエピソードをつくり、それらを言わばコラージュのように結びつける―であった。このように生み出されたルーセルの奇想は、同時代の通俗小説に内在する人種差別的イデオロギーに対する一種の批判性をも内在したものであることが理解された。

■ 就職のお知らせ

グローバル COE 関係者下記 2 名のアカデミック・ポストへの就職が決まりました。おめでとうございます。
グローバル COE 研究教育員の西村善矢さん（西洋史学） と永田道弘さん（仏文学）が 2009 年 3 月 31 日をもって退職し、同 4 月 1 日より、それぞれ名城大学准教授、大分県立芸術文化短期大学専任講師として着任することが決まりました。お二方の今後のいっそうのご活躍を祈念いたします。

本文中のフランス語の表記におけるアクセント記号は省略しました。
次回のメール版 NewsLetter の発行は 2009 年 4 月中旬 を予定しています。

・・・・・・━━・・・・・・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.18
発行：GCOE 編集部
編集担当：鎌田隆行
Copyright(C) 2009 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・・・・・・━━・・・・・・